



Title	『岡本花亭』（高木重俊著 研文出版）
Author(s)	佐野，比呂己
Citation	国語論集，9：360-361
Issue Date	2012-03
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7407">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7407</a>
Rights	

【圖書紹介】

『岡本花亭』（高木重俊著 研文出版（研文叢書） 平成二十三年（二〇一一）月十月 全二二四頁）

北海道教育大学釧路校准教授

佐野 比呂己

平成二十年（二〇〇八）十一月十二日、「岡本花亭」の名を初めて知った。それは語学文学会学術研究会が旭川で開催され、高木重俊（現・北海道教育大学名誉教授）が「岡本花亭と『信山唸稿』」と題しての講演の際であった。

岡本花亭（一七六七—一八五〇）は江戸時代の幕府勘定奉行であった。しかし、文政元年（一八一八）三月、建議して悪弊を除くことを請うたが、かえって老中水野忠成に忌まれ、小普請支配に貶された。十九年後の天保八年（一八三七）十二月、老中水野忠邦に登用され、七十一歳で信濃中野代官を命ぜられ、老齡の故をもって江戸にいたることを許された人物である。

花亭は詩に魅入られた人であった。書齋の庭に花を植えて花屋敷の主、という意味の花亭と名乗った。しかし、詩を生業とする職業詩人の道に踏み込むことはなく、あくまでも幕吏としての身分を離れずに漢詩を読み続けたのであった。

本書の目次は、左記の通りである。

まえがき

第一章 岡本花亭の生涯と詩業

一 岡本花亭の生涯の概説

二 花亭詩の諸相

(1) 友と会して

(2) 身世の思い

(3) 花亭の詩と人物に対する評価について

第二章 岡本花亭と『享余一擲』——泊翁との文学交流

一 『享余一擲』の写本

二 花亭と泊翁との唱和をめぐって

三 芳津館筆談抄録

第三章 花亭・詩仏と練堀小路

# 岡本花亭

高木重俊著



一 唱酬の発端——江山詩屋の詩会

二 両人の唱酬の立ち上がり——「斉物」の思いと世俗への絶縁

三 老詩人が詠じる中国の話題

四 練堀小路の二人の住まいと交友

第四章 岡本花亭と『信山吟稿』——文人代官の文学世界

一 代官就任と初めての仕事

二 信州中野の任地視察

三 民の訴訟と繁獄への思い

四 民を導く父母の官たるつとめ

五 「論狼詩」をめぐる

六 江戸への帰途と帰着の後

〔資料〕岡本花亭詩題検索

あとがき

索引

花亭については、これまで官人としての研究は見られるが、詩人・花亭の研究は十分になされてこなかった。

高木は、まず、花亭の生涯・交遊をたどりながら、一方で、花亭がどのような時代の流れの中に生きたかを概観している。さらに、花亭が情熱を傾けた漢詩から看取できる個人的な表現や独自の感性を俯瞰し、江戸後期の文壇で花亭ならびにその文芸が、同時代人からどのように評価されていたかについて考察している。

当時の花亭と文化人達との交遊の範囲は広く多彩であった。特に、注目すべき点は、非常に年齢差のある若い者たちの、指導者、支柱としての役割を担っていることである。これは、正に現在の高木の立ち位置と評者には重なって見える。評者は、高木のもとで漢文学を学び、現在も高木を慕い、共に学ぶ第一線で活躍する漢文学研究者を複数知っている。

本書には、「資料」、及び索引も附されており、今後の花亭研究、江戸後期の文学研究に大きく貢献するものである確信する次第である。